

## 政治学概論 II 2024 w12 (2月6日3限) リーディングアサインメント:

建林・曾我・待鳥「官僚の自律性と能力」(『比較政治制度論』)

氏名	Q1	Q2
赤星	p.205～の官僚の自立性について各国の比較が行われている部分	理由は、まず官僚の自律性ということを初めて知ったし、反対に政治家に支配されている官僚がいることを知ったから。また、これに関する各国の差が法律の長さに起因しているというのが、意外なところに要因が存在しているのが面白いし、自律性が大きいところと小さいところがある程度同じ地方に集まっているのも興味深いと感じたから。
岩田	「自律性を奪われた官僚は、国家が期待する能力を十分に発揮することができないだろう。」(p.202)	国民の意向をできるだけ政府の運営に反映させることを目指す場合には、官僚を政治家に従属させるべきであるということから、官僚には自律性と専門性の両方をバランスよくしなければならないという点が重要であると感じたから。選挙で国民に選ばれたのは政治家であるため、官僚は政治家の言いなりになるべきであると思われがちであるが、自律性という側面がないと能力が発揮できないというところが面白いと考える。
内坂	私が重要だと思った箇所は200ページの官僚制の2つの構成要素についてである。	この部分が印象に残ったのは、私が官僚制を構成する要素について初めて学んだからである。官僚の行動を規定する制度としての官僚制を構成する第一の要素は自律性の程度であり、第二の要素は能力をどの程度重視するしくみとなっているかということである。また、官僚の非自律性と能力がトレード・オフの関係にあるということも学んだ。
宇名手	官僚の自律性と政策 (P.209)	官僚の自律性が高まることで、官僚に対する民主的コントロールが効かなくなり、官僚が自由に政策を形成する事が出来るということに興味を持った。国民や市民が望む政策の成立には、官僚の自律性との関連性が高いという事に驚いた。また、自律性が極端に高くても低くても国内への影響は大きいのではないかと感じた。
遠藤	官僚制は非民主的性格であるからこそ官僚の能力発揮に関係しているということが重要だと思った。p.202	官僚は能力は長けているとはいっても、有権者である国民から直接選ばれないということから、官僚制について非民主的側面を感じていた。しかし、官僚が自由を奪われることによって国民が期待する能力である専門性を十分に発揮することができないということから考えると、重要な政治を執行していくうえでは必要であり、国民の願いに合えば違った意味で民主的な捉え方ができると感じたから。
大石	P202 官僚の自立性と能力の関係性に注目した	官僚はこれまでのイメージだと議会で政治家に助言している様子を見ているばかりであったが、反対に政治家が官僚の自立性をコントロールしていくという認識がなく、新たな考えとなり重要だと思ったから。また、官僚が政治家の言いなりになるのか自由になるのかで能力の出し方が変わると知り、官僚をどのように扱うかで政治が大きく変わると感じたから。

(continued)

氏名	Q1	Q2
大久保	自律性と能力をどのようにとらえるか (p.202)	最近の日本の中では、官僚になるのはかなりのエリートといわれているが、官僚は一部の奉仕者ではなく全体の奉仕者としての行動が必要になるとともに、行政の根幹を支えるような仕事をしているからこそ、個々人の能力を十分に引き出すような組織構造を作り、短期的な政治状況の変動から自由にすることが必要になる。しかしながら、今の官僚にはそのような力があるのか疑わしく、数年に一度は政治家や官僚が関わる問題事案が発生しており、官僚としての素質が問われているようにも思った。
片山	この結果として市民の望むような政策とはほど遠い政策が成立する。	個人的には、このことは現在の日本でも問題になっていると思う。特に、財務省の自立性が強いからか、経済政策においてはアホみたいなことしかせず、経済停滞を招いている。また、財務省は予算の策定に大きく関わってなるから他の省庁よりも強い。だから、自分たちの権力に優越感をおぼえてるのか知らないけど、政策はカスで市民は物価高で賃金も上がらず苦しんでいる。なのに、増税はすぐ決まって、市民は余計苦しむ。だから、自分は官僚の自立性は市民のため議論しなければならないと思ったので、ここが重要だと思った。
加藤	7 ページの官僚の自律性が高まること	官僚の自律性が高まることには、メリットもあればデメリットも存在すると考えたからである。特に、官僚が自分たちの判断で独立して行動する場合、政治家や市民社会との関係が希薄になったり、政策決定におけるバランスが崩れたりするリスクが生じることがある。官僚の自律性が高まると、政治家の影響力の低下によって、選挙で得た支持を基に政策を決定すべきという民主的な観点から離れていくと考えられる。自立性や透明性、責任のバランスをとることはもちろん、力の均衡と分立がいかに重要なのかを裏付けている箇所だったと感じた。
喜多川	官僚の二つの構成要素	官僚制を構成する要素として「自律性」が挙げられていたが、その自律性の説明に興味を持った。政治家は国民から選ばれていることから民主的と言えるかもしれないが、官僚は政治家の選任のみに基づいて選ばれるため、非民主的な側面を持つ。つまり、政治家のコントロールが不十分な時は、非民主的・自立的な存在になるという話が面白かった。
黒田	自立性の帰結	過去の日本は、権力が分散化していたがために軍部が暴走し、世論は求めている戦争を始めたため、官僚の自立性が高まると国民が予期せぬ政策が実施される可能性があるということで、現在の日本の官僚体制の動向によく注目しておかなければならないなと感じたから。しかし、日本は非自律的な要素も持っており、他国の官僚制はどのような仕組みになっているのか詳しく知りたいと思った。
黒田	自立性の帰結 p209(ページ数の記載を忘れていました)	過去の日本は、権力が分散化していたがために軍部が暴走し、世論は求めている戦争を始めたため、官僚の自立性が高まると国民が予期せぬ政策が実施される可能性があるということで、現在の日本の官僚体制の動向によく注目しておかなければならないなと感じたから。しかし、日本は非自律的な要素も持っており、他国の官僚制はどのような仕組みになっているのか詳しく知りたいと思った。

(continued)

氏名	Q1	Q2
小松原（健）	は、官僚の自律性（非民主性）と能力（専門性）をどの程度まで重視するかによって特徴づけられる政治制度として整理できる。p.4	官僚制について、自分自身あまり考えたことがなく、特定の団体などと癒着して悪い方向へと向かうイメージしかなかった。しかし、官僚制が持つ専門性というのは、国も政策を実現できるかなど考えるうえで非常に必要な能力であると思った。政治活動において、本当にそれは実現できるのかという政策を耳にすることがある。そのなかで、官僚の助言というのは必要不可欠であるのではないかと感じた。官僚の自律性は大きな問題ではあるが、官僚制そのものを否定することはできないと思った。
田辺	官僚個々人の能力を十分に引き出すような組織構造 (204 頁)	官僚制の専門性や人事管理の話が書いてあり、政治学概論Ⅰの「ゼネラリストとスペシャリスト」の話を思い出した。日本では数年ごとの部署異動が多く、その現場になれるころには、次の部署に行くことが多いため、その分野のスペシャリストが育ちにくいことを学んだ覚えがある。どこの学部を卒業したのかといった官僚の学歴だけでなく人事管理による専門性についても考える必要があると思った。
為石（智）	官僚の自律性 (pp.205)	非民主的な官僚が政治家に与える影響が大きな場合、国民による選挙で選ばれた政治家が民意を政治に反映しづらくなることが問題となっている。官僚は専門的知識や経験を有するため政策決定において重要な役割を果たすが、選挙によって就任することがない分、民間の視点を取り入れることが少ない場合がある。政治家は、官僚と比較して、国民の立場や実態を把握しやすいため、政治家と官僚が適切な距離感を保ち、お互いの強みを生かすことの重要性を認識できた。
丹後	官僚制 200～204	議会が政策を決定する一方で、実際の政策執行を担うのは官僚であり、議会と官僚の関係が政策の結果に大きな影響を与えるということが印象的であったから。官僚にどの程度の裁量を与えられるか、また議会がどのように官僚を監督するかが、政策の実効性や民主主義の質を左右するほどだとは知らなかった。官僚の権限が強すぎると、民主的統制が弱まる。一方で、政策の実施が遅れたり、専門性の低い決定が行われたりする可能性がある。
富谷	官僚制は、官僚の自律性と能力をどの程度まで重視するかによって特徴づけられる政治制度として整理できる。という点	自律性を奪われた官僚は、国民が期待する能力（専門性）を十分に発揮することができない。官僚の自律性と能力性は両義性を持っているという事がわかる。また、官僚制という政治制度においては、非自律性（民主制）と能力（専門性）はトレード・オフ（負の相関）の関係にあるという事が述べられており、官僚制における自律性と能力は密接に関係しているという事がわかる。
西田	「民主主義体制下での官僚制が持つ両義性」(202 頁)	国民の意向を政府の運営に反映させることを優先すれば、官僚が政治家に従属することとなるため、官僚の自律性が失われる。官僚の自律性が失われれば、官僚に対して国民が求める活躍が期待できなくなる。反対に、官僚の自律性を優先すれば、国民の意向を反映できなくなる。このように、官僚制下ではどちらかを優先することはできず、非自律性と能力のバランスを取ることが重要であることが理解できた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
野田	官僚の自立性は国によって異なり、自律性が高まれば高まるほど市民の望むような政策を行われなくなり、官僚批判につながるということ。(209ページ)	日本は、官僚の自立性が比較的高いように思われる。それは、年上の人や、立場の上の人に逆らえず、官僚の一存で物事が決定されていくことも少なからずあると思うからである。日本の固定的な風土が政治にかかわっているのかもしれないと思った。そういった意味では、官僚は市民に監視されるような有効な制度が求められるのかもしれない。
原田	p206-207 意思決定手続きへの制約と委任の範囲の関係について	政治家による官僚への権限委譲の程度と決定手続きへの制約を数量化したことで意思決定手続きへの制約と委任の範囲に負の関係が見いだせること、つまり官僚に与えられる権限委譲の幅が大きいほど、決定に関する手続きが多く課されることが明らかになったという部分がとても面白いと感じたから。その部分に関しては面白いと感じる一方でそうになってしまう要因が読み取れず疑問に感じた。
藤井	官僚の採用方法について (P.204)	官僚の採用方法について、一定の知識や業務の処理能力を客観的に測定可能な試験形式で判断することで採否を決める方式が任命権者の選考より望ましいとの考えをもったため選んだ。任命権者による選考はどうしても任命者の意向が反映されてしまい、官僚のもつ強みを生かせず自律性に欠けた政治を行ってしまうのではないかと予測する。一定の知識や業務の処理能力といったものは、勉強や経験を重ねれば伸びるものとしても、官僚に就任する際にははじめから十分に身に付けておく必要があり、そのような能力こそ重視するべきだと考える。
藤田	日本の官僚集団は基本的に社会から自律的な選考をもつ国家アクター型だ p 206	日本の官僚は全員とは言えないが、家柄や身分に関係なく厳しい試験を突破した能力の高い人間が官僚になることが多いと感じる。しかし、彼らは仕事をする能力は十分にあると思うが、政治家に逆らってまで自分の意見を押し通せる人は少ないと思う。私欲を満たすために仕事をする政治家がいても、官僚はその圧力に負けてしまうことが多いと思う。そのため、最初は官僚も社会的に自立した国家アクター型だと思うが、徐々に政治家のコントロール下に操られる人間になっていく人が多いことを考えると、日本の官僚集団は自律的な存在とはいえず、パワーエリート型だと感じたため、この箇所を選んだ。
本田	官僚の自律性 p 202	官僚の自律性とは多様なものだと思えることができたから。民主主義の体制においては、国民は政治家に求めている。この官僚の自律性によって、官僚がどれくらい政治に介入するかも変わってくるのだと知った。官僚の委任の程度なども国の政治体制によって大きく変わり、官僚にも権力の違いが国家間で生じるんだと学ぶことができた。
松本	P. 207 官僚の自律性指標	北欧の国が自律性指標が高く、北欧の国は教育の水準が高いため因果関係があるのではないかと感じたから。教育でどのようなことを行っているのかによって自分で行動したり考えたりする力が身につくのではないかと考えるため、このような結果が見られるのではないかと感じた。

(continued)

氏名	Q1	Q2
三島	。官僚制という政治制度においては、その非民主的性格こそが官僚の能力の発輝を可能とする側面があり、非自律性（民主性）と能力（専門性）はトレード・オフ（魚の相関）の関係にあるといえる。（202 ページ）	「民主的であること＝良いこと」というイメージは確かに強いですが、専門性を活かす場面では必ずしも民主的である必要はない、という考え方は新鮮だった。例えば、ある分野で深い知識や経験を持っている専門家がいる場合、その人の意見が最も適切であることが多い。民主的な方法で決定を下すと、どうしても意見が多様すぎて時間がかかるし、場合によっては決定が曖昧になってしまうこともあると考えた。
渡邊	官僚の在り方について（200～201 ページ）	官僚は自らの選好に即して意思決定を行い、行動することや、民主主義体制における官僚は、行政権の行使を担うという意味を持っていたり、国民の代理人であるなど重要な立場であることが興味深かったからである。官僚という言葉は聞いたことがあったけれど、これまでは政治家で何をしている立場なのかはわからなかったが、主権者である国民の代理人という立場であることがわかりかなり重要な立場であることがわかった。